

6節 キリストを信じる者の善き業は、神によって受け入れられる。

6-① それにもかかわらず、信仰者の人格そのものがキリストを通して受け入れられているので、彼らの善い業もまたキリストにおいて受け入れられる。

「神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。」 ⑥

エフェソの信徒への手紙 1・6

「あなたがた自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。」 ⑥

ペテロの手紙 一 2・5

「これがアロンの額の上にあるならアロンは、イスラエル人の聖別する聖なる物、すなわち、彼らのすべての聖なるささげ物に関するの咎を負う。これは、それらの物が主の前に受け入れられるために、絶えずアロンの額の上になければならない。」 ⑥

出エジプト記 28・38

※「咎を負う」— 大祭司がイスラエルの民の罪を負い、彼らのささげ物を携え、彼らに代わって神の御前に立つことを言う。(脚注)

「アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持ってきた。主はアベルとそのささげ物とに目を留められた。」 ⑥

6－② それは、その善い業が神の目から見て、この世で全く非難の余地も、叱責の余地もないからというのではない。

「たとい私が正しくても、
私自身の口が私を罪ある者とし
たとい私が潔白でも、
神は私を曲がった者とされる。」 ㊦

ヨブ記 9・20

「あなたのしもべをさばきにかけてください。
生ける者はだれひとり、
あなたの前に義と認められないからです。」 ㊦

詩篇 143・2

6－③ 神が御子において、善い業を御覧になって、たとえ多くの弱さと不完全さを伴ってはいても、誠実であるものを受け入れ、それに報いることをよしとされるからである。

「永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを死者の中から導き出された平和の神が、イエス・キリストにより、御前でみこころにかなうことを私たちのうちに行い、あなたがたがみこころを行うことができるために、すべて

の良いことについて、あなたがたを完全な者としてくださいますように。」 ㊦

ヘブル人への手紙 13・20、21

「進んで行く気持ちがあれば、持たないものではなく、持っているものに
応じて、神に受け入れられるのです。」 ㊦

コリント人信徒への手紙 二 8・12

「神は正しい方であって、あなたがたの行いを忘れず、あなたがたがこれまで
聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにな
らないのです。」 ㊦

ヘブル人への手紙 6・10

※カルヴァンは、(綱要)の中で、この聖句とアウグスティヌスの言
葉とを例に引いて、神は御言葉に服従する善い行い、キリストの御
名のために受ける苦難を決して忘れられないと言う。

『神は怠慢な我々を刺激することによって、御名の栄光のため
に忍ぶ労苦が空しくならないという確信を持たせたもう。』(※アウ
グスティヌス)・・・常に忘れないでおきたいことは、この約
束には他の全ての約束と同様、価なしに与えられる憐れみの契約が
先行し、そこに我々の救いの確かさの一切が依存するのでなければ
何の実りも我々にもたらさないということである。しかも、これに
依り頼む時、たとえ己の服従が相応しくないものであっても神の寛
大によって報いられるのだと揺るがずに信ずべきである。使徒は
我々をこの期待に固く立たせるため、神は不義でなく、ひとたび与
えた保証を一貫させたもうと確信する。したがって、この義は、負
うているだけのものを返す公正さよりも、むしろ神的約束の真実さ

を表している。この意味で語られたのがアウグスティヌスの有名な言葉で、この聖なる人物が記憶すべきこととしてしばしば繰り返すのを躊躇^{ためら}わなかったように、我々も絶えず記憶を新たにするに価するものと判断する。すなわち彼は言う。『我々の負債者となられた主は誠実であられ、我々から何も受けてないのに全てを約束したもう』(アウグスティヌス・詩編釈義)。(綱要)3-18-7

「その主人は彼に言った。〈よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。〉」 (改)

マタイの福音書 25・21、23

※この6節は、信仰者の善き行いは、汚れを伴っていても、キリストのゆえに神からの賜物として、神が受け入れてくださるということを述べている。

カルヴァンは、行いが神の賜物であると言い、キリストゆえに神が我々の善い行いをよしとされるとして、次のように言う。

「行いについて誇るのを禁じるのは、行いが神の価なしの賜物であると共に、行いが謂わば沈殿物によって汚れているからであると教えている。そのため、審判者としての尺度によって検討されるならば神を満足させることはできないのだが、我々の熱心を殺がないようにするため、純粹の赦しによって神の喜びたもうところとなる、と教えるのである。」(綱要)3-18-5

「信仰によってキリストに接されるや否やあなたは既に神の子とされており、

天国の世継ぎ、義に与った者、命の所有者である。更に・・・あなたは功績を獲得する機会を得たのではなく、キリストの全ての功績をあなたは共有したのであるから、既にそれらを持っているのである。」(綱要)3-15-7

「我々自身は、キリストの内に接がれることによって彼の罪なき浄さで己が不義を覆われたからこそ、神の前に義として進み出る。同じように我々の行いも、そのものとしては他のあらゆる悪徳を帯びているのだが、それはキリストの純潔の内に埋め込まれたために義となり、また義として受け取られるようになった。」(綱要)3-17-10

(解説)では、この6節を次のようにまとめている。

「これ(※6節)は、前項(※5節)の反面を述べたものであって、よきわざは未回心者のものとしては、救いに役に立たないばかりか、神の審判に耐えない汚れたものであるが、信者にとっては、その人格、性質同様、赦され、受け入れられるものとされ、従って、善行にふさわしい報いを頂くものと認められるのである。もちろん完全無欠な善というのではなく、それ自体としては非難されるはずのものなのに、キリストの故にあたかも欠点のないものであるかのように見てくださるというのである。」(解説)

同じことであるが、(註解)では次のように表現する。

「(※神が我々の善い行いを受け入れてくださる)基本的理由は、神がそれらの行いをそれ自体においてではなく、〈御自身の御子において〉ご覧になるということである。そこで、神は、それらの善い行いの〈多くの弱さと不完全さ〉にもかかわらず、その大いなる慈しみと愛のゆえに、父がその子の欠け多き行いを受け入れるようにそれらを受け入れ、御自分の民がそれに十分に値するわけではないにもかかわらず、彼らに報いを与えると約束して彼らを励ましてくださるのである。」(註解)